

名大医学部学友時報 2022 1

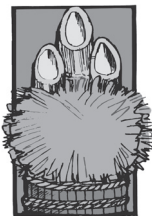
目次

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------------|------------|
| 1. 謹賀新年 | (1) | 4. 150 周年記念ウィーク | (8) |
| 2. 新年のご挨拶 | 松尾 清一 (2) | 5. 新春随想 | 太田美智男 (11) |
| | 門松 健治 (3) | | 佐藤 公治 |
| | 小寺 泰弘 (4) | 6. 謹賀新年 | (12) |
| | 梶山 広明 (5) | 7. 人生山あり谷あり | 井口 昭久 (16) |
| 3. 学術欄 | 増田 慎三 (6) | 8. 新春後記 | |

謹賀新年



新年のご挨拶



新年のご挨拶

東海国立大学機構機構長、名古屋大学総長

まつお せいいち
松尾 清一



名古屋大学学友会の皆さま、明けましておめでとうございます。コロナ禍に明け暮れた 2021 年が終わり、新しい年が始まりました。名古屋大学医学部は昨年創基 150 周年を迎え、今年からは新たな歴史を作っていくことになります。今年は私も年男で、しかも「五黄の寅」の年にあたりますので、昨年設立した東海国立大学機構（以下、東海機構）と名古屋大学の飛躍的な発展のために、粉骨砕身、努力したいと考えています。

近年、世界は DX、AI、IoT、科学技術イノベーションの急速な進展に伴い、かつてない規模とスピードで変化しています。また一方で、地球温暖化、プラスチックによる海洋汚染、経済格差の拡大、大国間の覇権争いなど、人類の生存を脅かしかねない深刻で困難な課題が明らかになっています。わが国に目を転じると、少子超高齢化と人口減少、あらゆる面での国際的プレゼンスの低下があり、国の勢いはピークを過ぎたように見えます。また今回のコロナ禍では、一言でいえば、施設の老朽化だけでなくあらゆる制度の疲労、即ちハードソフト両面においてすべてがシステムとして疲労した社会を我々は改めて目の当たりにしました。またその様な現状そのものも問題ですが、将来に向かって持続的に発展する強靱な社会を創ってゆく戦略、アクションプラン、そしてそれらをやり抜く固い意思が見えないことが、私たちに不安を抱かせている一番大きな要因かと思います。もっと言えば、危機感の欠如です。

国同様に、あらゆる組織においても同じことが言えます。即ち、名古屋大学、医学系研究科、附属病院においても、ネームバリューだけで今の状態がこのまま続いていくだろうというようなあいまいで根拠のない期待感だけで進んでいくと、明るい未来は期待できません。社会と大学のあらゆる領域で改革とイノベーションが必要です。たとえ小さなチャレンジであっても、大事に育て大きく花開かせる必要があると思います。そのような芽は、いくつも生まれていると思います。これらを大事に育てていくことが大切です。

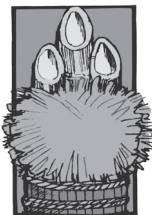
このような中で、すでにご存じのように名古屋大学は

昨年 4 月に、岐阜大学との法人統合により新たな国立大学法人、東海国立大学機構、以下東海機構を設立しました。これはしばしば誤解されて伝えられているような守りの統合ではなく、攻めの統合です。未来に向かって、地域創生への貢献と国際競争力の強化を同時に達成し、地域を丸ごと変革するようなインパクトを持った新しい国立大学法人のモデルを創るという取り組みで、社会からの期待も大きいことを感じています。

我が医学系研究科や附属病院においても、門松研究科長、小寺病院長を先頭にして多様でチャレンジングな取り組みが始まっています。医学医療と情報の領域にまたがる人材育成を目指した新たな卓越大学院プログラム「CiBorg」の開始、保健学科に医療情報系専攻を設置する組織改革、研究の成果を医療現場に実装するための支援組織メディカルイノベーションユニットの創設、メディカルシミュレーションセンターの改組による未来志向の xR センター設置、国際病院認証基準 JCR 認定更新の取り組み、橋渡し研究支援機関認証へのチャレンジ、名大病院と岐大病院の医療情報統合プロジェクトなど、意欲的な取り組みが目白押しです。これらに加え、世界に伍する研究大学を目指している本学としては、研究力の飛躍的向上は極めて重要な課題です。特に医学医療分野での奮闘を期待したいと思います。これらはきっとこれからの日本と世界の医学医療を牽引する種になると思います。今まで尽力してこられた関係者の皆様には心から敬意を表するとともに、ぜひとも引き続き大きく育てて頂ければ幸いです。

また法人統合を機に、名古屋大学と岐阜大学が医学研究科や附属病院という組織同士の結びつきをどんどん強くしていただき、医学医療分野でのインパクトを飛躍的に高めて健康医療面で人類に高い貢献を果たすような存在になっていただきたいと思います。

名古屋大学学友会の皆様におかれましては、心身ともに健康にはくれぐれも気を付けて頂き、今年は新たな歴史を作るべく、それぞれの立場で果敢にチャレンジをしていただければ幸いです。



創基 150 周年から踏み出す一步

かどまつ けんじ
医学系研究科長 門松 健治



学友会のみなさま、明けましておめでとうございます。

2020 年は東海国立大学機構元年、2021 年は名古屋大学創基 150 周年と、大きな足跡を歴史に刻む年が続きました。大学は公共の財産であり、同時に生き物であることを再認識させられる機会ともなりました。本稿は 12 月 5 日に書いていますが、中日新聞では来週から、後藤新平、勝沼精蔵、久野寧、高橋信次、杉田虔一郎などの先輩をシリーズで取り上げていただきますし、12 月 11 日の市民公開講座を皮切りに 150 周年ウィークが催され、12 月 18 日の記念式典で締めくくられます。本誌をお読みのみなさまも現地参加やオンライン視聴をしてくださった方が多いのではないかと思います。

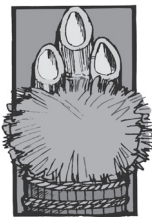
鶴舞地区ではこの数年の間に様々な前進がありました。その一つは、「医学 x 情報学」の進展です。CIBoG と名付けた卓越大学院プログラム、AI-MAILs と名付けた AI 医療人材育成プログラムが順調に走っています。2021 年 2 月には中央診療棟 B にあるシミュレーションセンターを改組してメディカル xR センターが発足しました。xR はバーチャルリアリティ (VR) などの総称です。ここでは VR による手術場や診療の見学ができる他、さまざまな教育コンテンツや xR 技術の開発を行っています。二つ目の前進は若手研究者の躍進です。科研費では「基盤研究 C」や「若手研究」の採択者が飛躍的に増えました。また、JST 創発的研究支援事業は国を挙げての若手研究者育成事業で 7 年間 (最大 10 年間) の研究支援を行うものですが、この 2 年間で名古屋大学は 38 名 (全国では 4 番目の多さ) の採択、中でも医学系研究科は 12 名で、部局としては最も多い採択となりました。来年の募集で最後になりますのでしっかりと支援したいと思います。三つ目の前進は東海国立大学機構直轄拠点の展開です。中でも糖鎖拠点は 2021 年 1 月に糖鎖生命コア

研究所 (iGCORE) となり、名古屋大学医学部からの参画が最も多い研究所が誕生しました。文部科学省ロードマップ 2020 に採択され、2021 年 10 月には共同利用・共同研究拠点の認定を受けました。いよいよ、iGCORE が中核となるヒューマングライコームプロジェクトの本格化が期待されます。

さて、私の研究科長の任期はこの 3 月までとなります。これまで 5 年もの間、学友会の先生方には大変にお世話になりました。常に温かい言葉をかけていただき、学友大会でも、メールでも、電話でも、励ましと声援をいただきました。本当にありがとうございました。この 5 年間、「医学医療の開拓」を掛け声に、医学部の教授陣、研究者たち、職員の方々には無理も申しました。挫けそうになったことも数え切れません。しかし、そのような時に背中を支え押してくれたのも上記の皆さんでした。感謝は言葉に尽くせません。

最後に、学友会のみなさまには創基 150 周年基金でも大変にお世話になりありがとうございました。これまでのご厚志により動物実験施設新築・改修、名古屋大学医学部史料館建設、名古屋大学医学部 150 年史編纂、150 周年記念式典が叶いました。これから、100 年経っても名古屋大学医学部に帰ってきたと思える心の拠りどころ「キャンパスアイデンティティ」の確立のために、メタセコイアの並木道を中心にした地域の整備を行う予定です。創基 150 周年基金は今年 2022 年末日までの期間限定です。既にご寄付いただいたみなさまはもとより、特に、寄付がまだの先生方には何卒よろしくお願いいたします。

今年が、みなさまにとって良い 1 年となりますようにお祈りいたします。医学部にとっても、今年が創基 150 周年から踏み出す一步にふさわしい年となることを祈っております。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



新年のご挨拶

こ で ら
やすひろ
名古屋大学医学部附属病院長 小寺 泰弘



学友会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

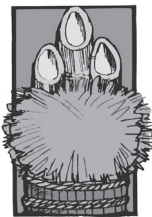
旧年中も話題の中心は新型コロナウイルス感染拡大であり、とくに重症化率の高かった第4波、驚異的な感染者数を記録した第5波では皆様もギリギリの闘いを強いられたものと推察いたします。名大病院ではコロナ対応のために一般病棟を2つ閉鎖しました。こうして空けた病棟でコロナ感染者の診療をしているものと誤解されがちですが、そうではなく、そこで勤務する看護師さんに異動をお願いしてICUでのコロナ重症者診療に手を貸してもらうための病棟閉鎖なのです。結果として、もともとICU勤務となっていた看護師さん以外にも数多くの看護師さんから慣れた病棟での日常の仕事を奪い、ICUで精神的にも肉体的にも負担が大きな業務を強いることになってしまいました。看護師さんのみならずICU管理を行う救急医も不足しているので、全診療科の医師の手をお借りして厳しい診療に従事していただき、まさに総力戦でここまでのコロナ診療を行ってまいりました。その結果、旧年中は第3波から第5波までほぼ切れ目無く、数多くの挿管を要する手強い重症患者さんを受け入れ、救命いたしました。

3月からは接種を希望する医療者にワクチン接種を受けていただきましたが、その上で大型会場での大規模接種を支援し、さらに豊田講堂での職域接種に病院をあげて協力してワクチンを「うちまくり」しました。幸いワクチンの効果は絶大で、第5波では感染者数の割に重症化する比率は少なく、高齢者の搬入も著しく減少しました。安全で有効なワクチンが短期間で製造できるなどというのは「復活の日」や「アウトブレイク」など映画の中での話であろうと思っていたのですが、予想以上に早く完成し、認可されたことに驚きながら、そして本当にありがたき思いながら、さらには少々悔しくも感じながら、外資系企業のもつ科学力の恩恵にあずかりました。

一方、「名大病院の本来の診療をなるべく守る」と唱

えつつも感染拡大期には多くのリソースをコロナ重症者診療に差し出さざるを得なくなりました。その結果、コロナ以外での高度な医療を必要とする患者さんのご希望、あるいは平素より患者さんをご紹介くださっている会員の皆様のご期待に十分に答えることができない日々が続き、大変申し訳なく思うと共に、忸怩たる思いもいたしました。また、このことは病院経営上も大きな問題になるところでしたが、その点については旧年中には国から愛知県を通して手厚い支援をいただきました。本稿執筆時（令和3年11月下旬）には感染者数はこれまでになく落ち着いており、コロナに備えて空けてあるベッドには1ヶ月以上にわたり患者が1人もいない状態が続いていましたが、そのベッドには国から「空床確保料」が投入されていたので大きな経営上のダメージを受けることはありませんでした。しかし、国の財政も相当疲弊しているはずで、このような手厚い支援がいつまで続くのかは不透明と考えざるを得ません。新年度、すなわち令和4年4月以降の病院の収支を考える上でも、パンデミックの状況を横目で見ながら診療体制の復旧、または改変に向けてせいっぱいの工夫を行かねばなりません。このような post pandemic（ということなのか、with Corona なのか…）の診療体制の構築は、もとより名大病院のみならずどの医療機関様にとっても共通する課題であろうと思われます。しっかりと地域の感染状況を見極め、会員の皆様と共に知恵を出し合いながら、この危機を乗り越えたいと考えております。

さて、こうした中でも名大病院は橋渡し研究支援機関に認定されるようヒアリングを受けたり、JCI 認証の継続のための審査を受けたりして、容赦なく厳しい外部評価にさらされながら、指定国立大学の医学部附属病院にふさわしい姿であろうと努力を続けております。今年度も頑張りますが、少しは落ち着いて診療・研究・教育ができる1年であって欲しいと、心から願っております。会員の皆様、本年も何卒よろしく願い申し上げます。



新年のご挨拶

学友会時報部長 **梶山 広明**



新年あけましておめでとうございます、学友会時報部長を拝命しております名古屋大学大学院医学系研究科 産婦人科学の梶山（平成 7 年卒）でございます。本紙面をお借りして学友会の皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

時報の編集は時報部長・委員、学友時報事務局、そして学生スタッフが協力して行っており、皆でより良い時報の作成に日々努力しております。特に本誌の作成には医学部 3 年から 6 年生まで各学年 4 人、計 12 名の学生スタッフ（ボランティア）の皆様のご尽力によるところが大きく、彼らの働きぶりにはいつも感銘を受けております。学生スタッフが皆様に取材等で直接コンタクトを取らせていただく機会もあろうかと思いますが、どうかご厚情をいただけますと幸いです。

学友時報は、明治 33 年 12 月創刊の愛知醫学校同窓会雑誌に起源を有し、第二次世界大戦期間中も細々と発刊され続けました。戦後の昭和 21 年 11 月に改めて第 1 号として再構成され、本号にて第 864 号を数えています。基本的に毎月発行となるので計算すると 70 年以上綿々と続いていることになります。またこのまま順調に発刊が続けば 12 年後に記念すべき第 1000 号にいたる予定です。今後とも人事トピックス、最先端の研究紹介、プレスリリース、海外で活躍されている方の近況、受賞者の言葉、読書のススメ、私の旅行カバン、同門の先生方の回想録やご近況など盛りだくさんの内容で発刊していきたいと思っております。また今後とも「研修報告」や「クラブ活動報告」といった研修医・学生さんに焦点を当てた幅広いトピックスで掲載していきます。本年も学友会の皆様から積極的なご寄稿、取材のご紹介やご提案をいただけますと幸いです。

さて話は変わりますが、昨今、地球の温暖化は関連するニュースが出ない日はないというくらい大きな社会問題となっております。温暖化に関連して、低炭素のクリーンエネルギーや再生可能エネルギーの話題にも事欠きません。確かに日本のエネルギー源の大部分を占める化石燃料に依存する火力発電は、二酸化炭素などの温室効果ガスを多く排出するため、地球温暖化の原因となることが指摘されています。一方、日本のエネルギー自給率は 10% 未満であ

り他の OECD 諸国と比較して低い水準であり、国際情勢の影響を受けると安定したエネルギーの確保が難しくなるという厳しい現状もあります。しかしながら地球というのは大きな時代の流れの中で温暖化と寒冷化を繰り返しているそうです。実際に歴史上の温暖化に伴って海水面が大幅に上昇した、「縄文海進」や「平安海進」という言葉もあります。また江戸時代は寒冷期にあたり、それが飢饉の頻発の原因となったともいわれています。さらに時間をさかのぼった最新の地層や化石の研究によると、今から約 22 億年前と約 6～7 億年前の少なくとも 2～3 回、地球まるごと凍ってしまった「全球凍結」という状態になったことが判明しています。全球凍結した地球ではあらゆる水が氷に変化したため生命の存続は不可能とも思われます。しかしながらごく一部の生命体は海底火山の噴火口のあたりでひっそりとそのような過酷な環境を生き延びました。最初の全球凍結のあとに原核生物から真核生物へ、次の全球凍結のあとに単細胞生物から多細胞生物へと大進化が occurred。そしてその後 5 億 4200 万年前から 5 億 3000 万年前の間に「カンブリア爆発」という生物種の大躍進が occurred。今日見られる多様な動物種が出そろったというのがご存知のとおり生物進化のシナリオです。新型コロナウイルス感染症は世界中の人類にとって 100 年に一度の大きな災いとなりました。この 2 年間はコロナ禍の影響でいままで当然のように過ごしてきたライフスタイルが大きな変貌をとげました。今後、従来にはない暮らし方、働き方、根本的な価値観、テクノロジー、そしてコミュニケーション手段などを通じて人類の加速度的な進化が到来するのは確実と思われます。すなわち誰もが未曾有の状況で、日々一寸先が見通せない世の中ではありますが、大きな危機の後には大幅な進化が生じるのも歴史上の事実です。

このような時代の転換期に、学友会の皆様に少しでも心温まる様々な記事をお届けしたいと考えております。本年も時報部の活動が皆様方の心の架け橋となるよう、スタッフ一同まい進していく所存です。学友会の皆様におかれましては、引き続き温かいご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



研究トピックス

乳腺診療 20年の歩み

病態外科学講座 乳腺・内分泌外科学分野 教授

増田 慎三



学友会の皆様におかれましては、ご清栄のこととお慶び申し上げます。このたび、令和3年10月1日付けで病態外科学講座 乳腺・内分泌外科学の教授を拝命いたしました。これまでの研究経緯を紹介させていただく機会に御礼申し上げます。

1. 大学院での基礎―臨床の橋渡し研究

外科初期研修期間に乳腺診療の奥深さを知り、その専門性を高める決意で、大阪大学大学院医学系研究科に進学しました。病理ホルマリン固定標本中のRNA構造変化と適正なRNA抽出法確立に関する基礎研究を細胞生体工学センターで遂行したのち、その手法を腋窩リンパ節微小転移の臨床学的意義に関する臨床研究に融合し、学位を取得しました。当時、標本固定中にRNAが分断化され、病理保存検体を用いたRNA発現研究は難しいとされていました。まず、阻血から速やかにホルマリン固定することでRNase活性の影響を受けず、RNAは保持されること、しかし、固定期間が長くなると、架橋形成が進行し、RT-PCRの効率も低下することを確認しました。飛行時間型質量分析装置(TOF-mass)を用いた分子量変化の解析により、ホルマリンによる核酸への影響を検討した結果、RNA塩基のアミノ基にメチロール付加反応とメチレン架橋反応が起こるが、RNAは分断化されないことを示し、その架橋形成が、cDNA合成を阻害し、RT-PCRを用いた研究の妨げになっていることが推定されました。Proteinase-Kを用いて、ホルマリン固定標本から効率よくRNAを抽出でき、さらに加水分解にて付加メチロール基を除去することで、cDNA合成およびPCR効率も高めることができました(文献1、図1)。本成果を用いて、当時臨床的課題であった乳癌腋窩リンパ節における微小転移検出の意義を、長期予後の判明している患者の病理保存検体を用いて、証明することができ(文献2)、その後の外科手術におけるセンチネルリンパ節転移の術中診断(OSNA法)の応用につながりました。また、外科手術標本の適切な取扱いの啓発、遺伝子発現解析手法を用いた乳癌診療の個別化臨床研究(たとえば、再発予測ツールのOncotypeDXの日本人におけるvalidation研究やtranslational research)に繋がり、その普及に貢献しました。

2. 乳腺専門医として診療の第1線で臨床研究への参加と推進

大学院卒業後は、乳腺専門医として、市立堺病院(2年間)と国立病院機構大阪医療センター(18年間)に勤務しましたが、個別化治療の基本となる術前薬物療法を中心に、多くの臨床研究を起案、遂行しました。新規薬剤の開発治験にも積極的に参画し、臨床研究の実践を第一にという姿勢で日々の診療を構成

しました。

在阪5大学とその関連病院を中心に構成されるKBCSG(Kinki Breast Cancer Study Group)では、中心メンバーとして、術前治療の評価や進行再発乳癌における新しい治療ストラテジーの検証、Real-world研究を牽引しています。また、全国区のJBCRG(Japan Breast Cancer Research Group)では臨床試験担当常任理事として、多くの臨床研究をコーディネート、関連委員会活動を率いてきました。現在、代表理事を務めさせていただいています。

再発高リスク乳癌患者に術前化学療法(アントラサイクリン系とタキサン系の標準療法)を施行し、手術後病理検査で、浸潤癌完全消失(pCR)なら、良好な経過が期待できる一方、遺残ありのnon-pCRなら予後不良であることを、先行臨床試験を通して体現し、予後不良群への新たな工夫が、次なる課題として喫緊であると気づきました。そこで、JBCRG-04(CREATE-X)試験では責任医師として、韓国との国際共同多施設試験を取り纏め、術前標準化学療法でも癌遺残をみとめた症例を対象に、経口FU系抗癌剤capecitabineの追加投与による予後改善を証明しました(文献3、図2)。この成果は、NCCNガイドラインにも反映され、術前治療の効果に応じた個別化治療実践の、初の成功例であり、世界的にも周術期化学療法のあり方を変える重要な臨床試験として位置づけられています。

多くの企業主導の新規薬剤開発治験に参加するとともに、3件の医師主導治験を責任調整医師として遂行しました。例えば、JBCRG-20試験では、HER2陽性原発性乳癌の対する術前治療法として、TCbHP(docetaxel + carboplatin + trastuzumab + pertuzumab)療法の評価と、抗体薬物複合体であるT-DM1と用いた治療反応性に応じた個別化ストラテジーを検証する医師主導ランダム化比較試験を遂行しました(図3、文献4)。TCbHPの有効性(癌の完全消失pCR=57%)ならびに日本人における安全性は、従来の海外報告と同等であることを示し、pertuzumabの術前治療における保険適応拡大の重要な申請資料として利活用されました。また、ホルモンレセプター陽性タイプでは、TCbHPにT-DM1を逐次追加するレジメが最も有効であること、さらに、脱毛や末梢神経障害、骨髄抑制を回避し毒性軽減が期待できるT-DM1ベースの治療法は、4コース経過のタイミングで、治療反応性の評価(画像+中央病理診断)を加えることで、標準治療であるTCbHPとほぼ同等のpCR率を得ることができることを証明しました。T-DM1の適応拡大には残念ながら結びつきませんでしたが、この治療反応性に応じた治療法変更ストラテジーは、その後の臨床研究でも採用

され、個別化治療を検討する上で有用であると考えます。

企業治験に積極的に参加することにより、グローバル試験の steering committee の経験や海外オピニオンリーダーとの交流の機会をえることができ、最新の知見を学び、我が国の乳癌診療の進歩に微力ながらも寄与できたものと思います。また、開発部門との密なコミュニケーションに心がけ、創薬のみならず、臨床現場に役立つような add-hoc な解析を提案し、薬剤承認後の育葉にも努め、適正使用に有用な情報を発信してきました。

3. 乳癌診療の今後の展望

乳癌は女性の癌罹患の中で第 1 位であり、好発年齢が 40-60 歳代であることから、社会的にも注目度の高い疾患です。一方、治療法の進歩により 5 年生存率は優に 90% を超え、治療成績は向上してきました。治療強度をあげ乳癌死亡を減らす方向 (escalation) と、同時に薬物療法や手術などの負担を軽減する (QOL 向上や医療費削減) 方向 (de-escalation) の視点から、手術と薬物療法のバランスを個々に考え、より個別化そして最適な治療を提供することが期待されています。臨床研究から得られるエビデンスのみなく、基礎研究との橋渡し研究を進めることで、その基盤が強固になると同時に、未知な臨床的課題の解決につながるようなヒントが得られます。アカデミアは、臨床研究と基礎研究の融合を容易とする舞台と考えます。広い分野の先生方のご支援を得て、より最適な乳癌診療で“乳癌 100% 克服”を目指していきたいと思ひます。

参考文献

- Masuda N, Ohnishi T, Kawamoto S, Monden M, Okubo K. Analysis of chemical modification of RNA from formalin-fixed samples and optimization of molecular biology applications for such samples. *Nucleic Acids Res.* 27 (22) :4436-4443, 1999.
- Masuda N, Tamaki Y, Sakita I, Ooka M, Ohnishi T, Kadota M, Aritake N, Okubo K, Monden M. Clinical significance of micrometastases in axillary lymph nodes assessed by reverse transcription-polymerase chain reaction in breast cancer patients. *Clin Cancer Res.* 6 (11) :4176-4185, 2000.
- Masuda N, Lee SJ, Ohtani S, Im YH, Lee ES, Yokota I, Kuroi K, Im SA, Park BW, Kim SB, Yanagita Y, Ohno S, Takao S, Aogi K, Iwata H, Jeong J, Kim A, Park KH, Sasano H, Ohashi Y, Toi M. Adjuvant Capecitabine for Breast Cancer after Preoperative Chemotherapy. *N Engl J Med.* 376 (22) :2147-2159, 2017.
- Masuda N, Ohtani S, Takano T, Inoue K, Suzuki E, Nakamura R, Bando H, Ito Y, Ishida K, Yamanaka T, Kuroi K, Yasojima H, Kasai H, Takasuka T, Sakurai T, Kataoka TR, Morita S, Ohno S, Toi M. A randomized, 3-arm, neoadjuvant, phase 2 study comparing docetaxel + carboplatin + trastuzumab + pertuzumab (TCbHP), TCbHP followed by trastuzumab emtansine and pertuzumab (T-DM1+P), and T-DM1+P in HER2-positive primary breast cancer. *Breast Cancer Res Treat.* 180: 135-146, 2020.

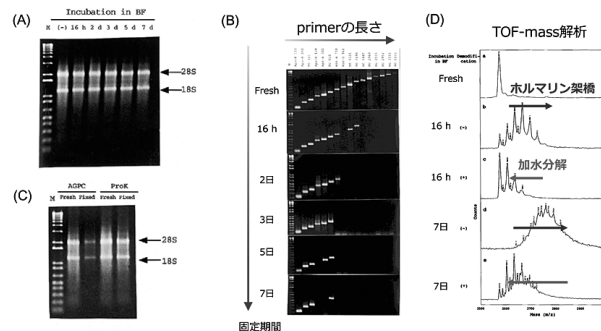


図 1

ホルマリン固定標本からの適正な RNA 抽出法の確立。(A) ホルマリン固定標本から抽出された RNA は 28S、18S バンドが保持され、固定期間が長くなると収量の減少は認められるが、質は保持されている。(B) Fresh サンプルからの RNA に比べ、固定期間が長くなると RT-PCR 可能な primer 長が短くなる。(C) Protease-K 存在可で加水分解することで、RNA の収量が改善する。(D) TOF-mass 質量分析で、ホルマリン固定期間に応じて架橋形成が生じること、加水分解でその架橋を外せることを傍証した。

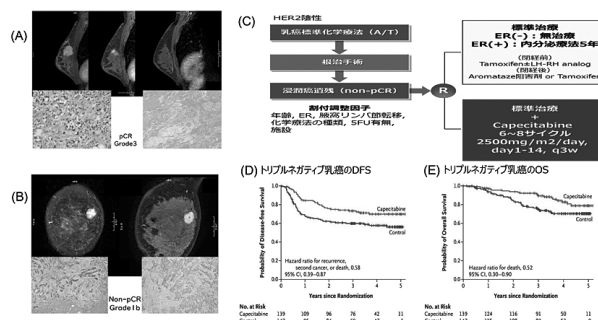


図 2

術前化学療法による個別化治療。(A) 標準術前化学療法 (アントラサイクリン系+タキサン系抗癌剤) で完全消失した pCR 症例。(B) 術前化学療法効果不十分例 (non-pCR)。(C) 術前化学療法で浸潤癌遺残を認めた non-pCR 症例を対象に実施した JBCRG-04 (CREATE-X) 試験のデザイン。(D) (E) HER2 陰性の登録例全例を対象でも再発抑制効果ならびに生存改善傾向を認めたが、より予後が悪く治療法が限定されるトリプルネガティブ乳癌では再発抑制効果 (HR=0.58) ならびに生存改善効果 (HR=0.52) を Capecitabine を術後 6~8 サイクル追加することで得られた。

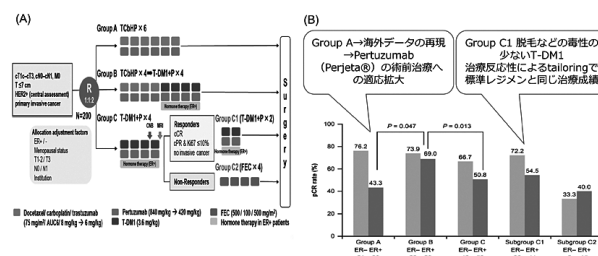


図 3

原発性 HER2 陽性乳癌を対象とした術前化学療法による個別化治療。(A) 医師主導治験のデザイン。Group A は Pertuzumab の保険適応拡大を目的としたレジメン。Group B は、より高い pCR を期した Escalation レジメ、Group C は、抗癌剤に比べて脱毛などの毒性の少ない T-DM1 をベースとした De-escalation を目的としたレジメを同じプラットフォームで検討できるのが医師主導治験の利点である。(B) 各治療グループ毎の ER status 別の pCR 率を示す。

150 周年記念記事 150 周年記念ウィーク

取材：時報部

12 月 11 日 (土)

名古屋大学医学部学長の門松健治先生からの、150 周年ウィークを迎えるに当たって参加者の皆様へのお礼と挨拶により開幕しました。

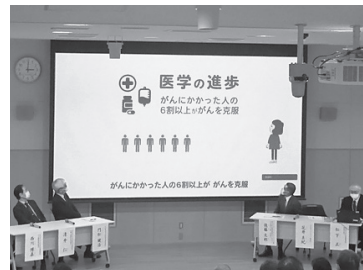
鶴舞公開講座の第一部では、基礎研究の分子細胞免疫学教室の西川博嘉先生から「名古屋発信の基礎研究に基づく新たながん治療の展開」という題目で、免疫学発展の歴史や世の中への貢献について述べられました。次に、血液・腫瘍内科学の清井仁先生から「名古屋大学がリードする血液がん治療」の題目で、白血病治療の進歩についてのお話をされました。

その後、ブリストル・マイヤーズ・スクイブ社執行役員の後藤太郎様から「名古屋から世界へ—私たちの健康・生命をまもるためのイノベーション創出のための名古屋大学とBMSのパートナーシップ」の題目で、ひとつのサイエンスの革新がもたらす生活の変化についてや薬学の発展と医療の関係についてのお話を聞きました。

第二部では、輸血部松下正先生による司会の下、NPO 法人ミーネット理事長の花井美紀様も交えて、座談会が開かれました。参加者の方々と活発な討論が行われ、鶴舞公開講座は幕を閉じました。



特別講義



座談会

12 月 12 日 (日)

＊ メディカル xR センター公開について ＊

メディカル xR センターでは内視鏡手術の器具の展示が行われており、超音波凝固切開装置や手術用ステイプラーが次代の流れに沿って展示されていました。また、シミュレータで内視鏡手術の感覚を掴んだり、縫合や結紮の練習をしたり、血管内カテーテル治療の練習をしたりといったこともできます。



メディカル xR センター



医学部室内合奏団の OB/OG 演奏会

＊ 室内合奏団 OB/OG 演奏会について ＊

中央診療棟 A3 階の講堂にて、医学部室内合奏団の OB/OG の方々 4 人による演奏会が行われました。演奏はとても迫力があり、そしてとても美しい音楽が奏でられました。観客は皆、心から聴き入っている様子でした。

＊ 検査室公開について ＊

採血室では、車椅子の方など患者さんへの配慮がところどころに見られました。検体はエレベーターで検体検査室に送られます。検体検査室は自動化が進んでおり、夜間や休日でも 1 人で検査可能になっています。また、生理機能検査室では心電図やエコー、呼吸機能検査が行われています。



採血室



ポスターセッションの様子

✧ 研究室ポスターセッションについて ✧

中央診療棟 A3 階の講堂にて行われました。32 の講座 / 研究室 (アイソトープ総合センター分館、医療薬学・薬剤部、機能組織学、血管外科、健康栄養医学、腫瘍生物学、腫瘍病理学、消化器外科 1 / 腫瘍外科学、産婦人科、消化器内科 / 光学医療診療部、心臓外科、神経遺伝情報学、整形外科、生体反応病理学、脳神経内科、分子細胞化学、分子細胞免疫学、分子腫瘍学、分析機器部門、放射線科、麻酔蘇生医学、地域在宅医療学・老年科学、国際保健医療学・公衆衛生学、救急・集中治療医学分野、消化器外科 2、歯科口腔外科 / 顎顔面外科学、生物統計学、小児外科、中央感染制御部、細胞生理学、環境労働衛生学、泌尿器科) が参加しており、それぞれの研究内容の概要を説明したポスターの展示がなされました。また、各ブースには各講座 / 研究室の代表の先生がいらっしゃり研究内容について丁寧に説明していただきました。多くの先生方や学生が訪れ、研究内容などを互いに話し込んで交流している様子が各所で見られました。

✧ サークルポスターセッションについて ✧

150 周年記念の一環として、12 月 12 日 (日) に中央診療棟 A3 階の講堂にて行われました。9 つの学内部活やサークル (救犬、弓道部、陸上部、剣道部、テニス部、水泳部、医学部混声合唱団、東洋医学研究会、室内合奏団) がポスターを展示し、代表の学生が訪れた方々と交流が行われました。



軽音楽部による演奏会



サークルポスターセッションの様子

✧ 軽音部ライブについて ✧

新型コロナウイルスの影響で、長らく活動が制限されてきた医学部軽音部ですが、約二年ぶりとなる対面形式でのライブを、鶴友会館にて開催することができました。会場での検温や人数制限、観客の立ち位置指定など、感染対策に万全を期して臨み、全くこれまで通りというわけにはいきませんが、これからの活動に期待の高まるライブでした。先生方にも多くご来場頂きました。

12 月 13 日 (月)・16 日 (木)

✧ Webinar: 名大医学部の研究 ✧

12 月 13 日、16 日の 2 日間にわたり zoom のウェビナーにて名大医学部で行われている研究についての紹介が行われました。各研究室の担当の方が、その研究室でどのような研究をしているのかを 12 分程度でスライドを用いて説明されました。

13 日には、分子生物学、分子細胞学、消化器外科 2、眼科、顎顔面外科学、地域在宅医療学・老年科学、小児科、循環器内科の先生方からお話がありました。ポスター発表や特設サイトのビデオよりも更に詳しく名大医学部の研究について知ることができる機会でした。

16 日には神経内科学、腫瘍生物学、国際保健医療学・公衆衛生学、分子腫瘍学、総合医学教育センター、精神医学・親と子どもの心療学、救急・集中治療医学分野の教授より各講座の歴史及び研究内容についてのご紹介がありました。短い時間ではありましたが、幅広い分野の話を聞くことができとても勉強となった一時となりました。

12 月 14 日 (火)

✧ 医学部室内合奏団演奏 ✧



医学部室内合奏団による演奏の様子

12 月 14 日の 17 時から鶴舞キャンパス第 4 講義室にて、医学部室内合奏団による演奏会が開催されました。ルーマニア民族舞曲 (B. バルトーク) や PIRATES OF THE CARIBBEAN (クラウド・バデルト) など計 5 曲が現役部員によって披露されました。コロナ禍で制限のある練習の中でも部員全員の絶え間ない努力によって作り上げられた一体感と熱気が感じられる 1 時間の素敵な演奏会でした。

12月15日(水)



医学部ダンス部 演舞



12月15日の17時から鶴舞キャンパスの第4講義室にて、医学部ダンス部による特別公演が行われました。hiphop、lock、jazz、popからなる4つのジャンルのダンスが披露されました。コロナ禍で思うようにイベントが開催できない中、数年ぶりに外部に向けてのイベントを開催することができ、部員の熱意が感じられる公演となりました。



医学部ダンス部による特別公演

12月17日(金)



臨床医学留学 50年間の歴史と意義



12月17日の16時半からzoomのウェビナーにて臨床医学留学についての討論会が開催されました。フィラデルフィア小児病院の西崎彰先生と国際連携室の柏谷英樹先生の司会のもと、各パネリストによる7分の発表と3分の質疑応答の後、総合討論を行うという形で進行了。日米の医療における名大医学部卒業生の功績や米国での勤務経験を題材として、臨床留学の時代的変遷、卒前卒後臨床留学の名大医学部における役割について様々な角度から議論がされました。

12月18日(土) 創基150周年記念式典



1. オープニング 医学部混成合唱団



「今、ここに」「歩くうた」の2曲が披露されました。コロナ禍で活動が制限され、練習の成果を発揮できる舞台がない状況の中、団員たちの尽力により素晴らしい舞台となりました。団長からは舞台をセッティングいただいた先生方への感謝が述べられました。



2. 開会の辞 門松健治研究科長



初めに、今大会にご参加された方々へのお礼を述べられました。その後、150周年記念式典の開会を宣言なさいました。



3. 小寺 泰弘病院長 挨拶



初めに、今大会の開催に携わっていただいた方々へのお礼を述べられました。次に、名古屋大学病院の歴史についてお話があり、最後に附属病院の使命として最高レベルの診療を安全にお届けすること。次世代の医療を作っていくこと。次世代の医療者を作る事。以上の3点についてお話がありました。



4. 松尾 清一機構長 挨拶



150周年式典開催へのお祝い、名古屋大学が1971年仮病院仮学校としての創基から現在の形になるまでの変遷、その中での様々な先生方の活躍についてお話がありました。日本で進む少子高齢化など様々な問題に直面する中で「国立大学の役割、世界に飛躍する特定研究大学制度を目指すこと、挑戦者として社会へ貢献していく」未来を見据えたお話がありました。



5. 創基150周年記念事業の概要説明



門松健治先生から記念事業についてご説明がありました。3つの事業としてキャンパスアイデンティティ、ライフ・イノベーション推進のための施設整備、150周年史の編纂及び記念集会有り、どれも様々な方のご協力により達成されたもので、感謝を述べられました。



6. 特別講演 科学技術振興機構(JST)濱口道成理事長



「昔日の向こうにある未来へ〜150年をこえて〜」のタイトルで講演をいただきました。(内容は時報2月号に掲載予定となっております。)



7. ピアノリサイタル 沢田蒼梧



コロナ禍で困難な中ポーランドへ、ショパンコンクールに出場した医学科5年生沢田蒼梧が「ショパン アンダンテ・スピアノと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 作品22」、「ショパン バラード第1番 ト短調 作品23」、「ショパン スケルツォ第2番 変ロ短調 作品31」「英雄ポロネーズ」を披露してくださいました。初めて聴く世界レベルの生ピアノの迫力に会場中が圧倒されていました。



新春随想

岡崎恒子先生の 文化勲章受章によせて

名古屋大学名誉教授



おおた みち お

太田美智男 (S52 卒)

2021 年度の文化勲章を岡崎恒子先生が受章されて、久しぶりに昔のことを思い出しました。50 年ぐら前に医学部の学生だった私は、農学部セミナーにふと出席しました。そのセミナーである質問をした質素な服装の方に、演者の先生がとても丁寧に受け答えしていたのを奇異に感じ、隣の方にあの方はどなたですかと聞いたところ、岡崎令治先生でした。学部は違っても名大に入学して良かった、と思えた瞬間でした。まだ分子生物学が若い学問分野だった頃に、日本の中でその中心に居たのが岡崎令治先生でした。岡崎令治先生はノーベル賞受賞者のアーサー・コーンバーグの研究室から帰国して名大理学部の助教授、後に教授として DNA 複製機構を解明して、オカザキ・フラグメントと呼ばれる短鎖 DNA が短い RNA から合成され、それが結合して DNA 合成が行われることを発見し、誰もがノーベル賞受賞間違いなしと信じていました。しかし残念ながら 40 代で亡くなってしまいました。ある日ふと Method in Enzymology のシリーズの最新版を開いたら、扉ページにコーンバーグの岡崎令治先生を追悼する文が載っていました。心のこもった素晴らしい追悼文で、私の記憶にずっと残っています。その追悼文の中で、ある酵素を精製していたときに 1 ml からなら酵素が精製できるが、もっと大量に欲しいので 1 L から精製すると誰も精製できず失敗する。岡崎令治先生にやらせたら岡崎先生は 1 ml からの精製を千回くり返して見事に酵素の大量精製に成功した。それ以後その方法をコーンバーグの研究室ではオカザキ・メソッドと呼んだ、と書かれていました。最近はキットや手を掛けないというまい方法で実験をやるのが流行ですが、オカザキ・メソッドのような泥臭い方法も私はとても好きで、研究の神髄の一つではないかと思っています。

岡崎令治先生の後を継いだのが講師だった奥様の岡崎恒子先生でした。その後私は医学部の助手になって、研究のことで岡崎恒子先生に数回お目にかかりました。岡崎恒子先生は実家が医家だったためか医学部にとても好

意的でした。岡崎恒子先生は令治先生と共に素晴らしいご研究をされて、もう 88 才になられたのですね。今回の文化勲章受章には、岡崎令治先生の分も多少含まれているかもしれない、と考えるのは失礼でしょうか。

今年こそ

コロナ禍が収まりますように

日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院 院長

さとう こうじ
佐藤 公治 (S58 卒)

新年あけまして、おめでとうございます。新年の挨拶は、やはりコロナ禍の話題から始まります。スペイン風邪は終息に 4 年かかったといひます。現代ならワクチンも治療法も画期的に早く開発され 2 年で終息と言いたいところですが、もう少しかかりそうです。Covid-19 と人類が戦い始めて早くも 2 年になります。波が来る度に多くのことを学びました。今までも院内感染や手強い MRSA 感染などに気を遣ってきましたが、Covid-19 感染には手を焼いています。なんと言っても敵がよく分かりませんでした。感染力は弱くありませんが、感染元をトレースできます。犯人捜しは良くありません。感染者を増やさないようにするには早期感染者の診断と隔離でした。施設でのクラスターはなんとしても避けたい。院内感染すると、なぜか病院が悪いことをした気がしてしまいます。慎重な対処が必要でした。しかし今やワクチンや重症化させない治療薬などが開発され、少し制御できそうな気運となってきました。新規患者発生数でなく、入院患者数で人流制御を考慮します。日本人は真面目なので、手洗い・消毒・マスク・人混みを避けるなど感染防御は続けると思います。しかし国内はまだしも、海外へ行ける日はもう 1-2 年先かも知れません。なんとか早く波が小さくなっていくことを願います。

さてコロナ禍で DX やテレワークなど働き方が変わりました。デジタル化も進んだ感がありますが、日本は海外からずっと遅れている事に気がつきました。自分の生活も変わりました。どこでもオンライン会議ができるようにしました。対面の意見交換会は楽しかったけれども、オンライン参加は気軽に時間に縛られず便利です。一方、院外活動、学会出張や旅行が減り、オンラインでは運動不足です。家を掃除してみたり、庭仕事をしてみたり、とにかく体を動かす理由を作りました。私は整形外科医ですので、コロナ禍ロコモを危惧しています。健康寿命の延伸、体力増進が要です。

環境の変化、ピンチはチャンスでもあります。この機会に病院も何か新しいことにチャレンジしていきたいと思ひながら正月を迎えました。俯瞰的に地球規模で物事を考えたいと思ひます。

謹賀新年	時報部長 梶山 広明 会計部長 大野 欽司 庶務部長 尾崎 紀夫 会長 門松 健治 学友会		名古屋支部 支部長 小池 斌碩	埼玉支部 支部長 高窪 義昭
飛騨支部 支部長 折茂 謙一	東濃支部 支部長 加納 忠行	岐阜支部 支部長 小笠原 文雄	大垣地方支部 支部長 古川 武光 幹事長 坪井 幸夫 副幹事長 渡辺 幸夫	静岡県支部 支部長 小林 隆夫
三重県支部 支部長 亀谷 章	奈良県支部 支部長 竹村 恵史	東三河支部 支部長 山本 義樹	尾西支部 支部長 中條 千幸	知多支部 支部長 春田 和廣
岡崎支部 支部長 村上 英喜	静岡済生会総合病院 院長 岡本 好史	〒422-8527 静岡県静岡市駿河区小鹿二丁目一番一号 JA 静岡厚生連 遠州病院 名誉院長 水上 泰延 病院長 大石 強	〒436-8555 静岡県掛川市菖蒲ヶ池一番地の一 掛川市・袋井市病院企業団立 中東遠総合医療センター 企業長兼院長 宮地 正彦	〒420-8623 静岡県静岡市葵区北番町二三番地 JA 静岡厚生連 静岡厚生病院 名誉院長 玉内登志雄 病院長 水野 伸一

〒438-8550 磐田市立総合病院 病院事業管理者兼病院長 鈴木昌八 副病院長 田ノ井千春 副病院長兼事務部長 井下田覚	〒432-8580 浜松医療センター 院長 海野直樹 副院長 岩瀬敏樹 感染症管理特別顧問 矢野邦夫	〒509-6101 岐阜県厚生農業協同組合連合会 東濃中部医療センター 東濃厚生生病院 病院長代行 安藤修久 副院長 柴田尚宏	〒509-5193 岐阜県厚生農業協同組合連合会 東濃中部医療センター 土岐市立総合病院 病院長 塚本英人	〒507-8522 岐阜県多治見市前畑町五丁目一六一番地 岐阜県立多治見病院 理事長兼院長 近藤泰三
〒506-8502 岐阜県厚生農業協同組合連合会 飛騨医療センター久美愛厚生病院 病院長 堀明洋	〒504-8601 公立学校共済組合 東海中央病院 副院長 川端邦裕 副院長 小島克之 副院長 日比健志 副院長 松井春雄	〒503-8502 大垣市市民病院 副院長 金岡祐次 副院長 進藤丈次 副院長 小桐勢生 副院長 傍島正明 副院長 大西裕司 副院長 将裕美	〒509-0206 独立行政法人地域医療機能推進機構 可児とうのう病院 副院長 岸田喜彦 副院長 岩田敬和 副院長 伊藤貴彦 副院長 山田芳彰	〒508-8502 岐阜県中津川市駒場一五二番地の一 中津川市民病院 病院長 安藤秀男
〒508-0101 医療法人社団 日新会 城山病院 院長 赤座薫 事務部長 宮下智博	〒513-8501 国立病院機構 鈴鹿病院 副院長 久留誠 副院長 南山	〒510-8567 市立四日市病院 副院長 金城昌明 副院長 蜂須賀文博 副院長 中林規容 診療部長 渡邊純二	〒475-8599 半田市立半田病院 副院長 岡田禎人 副院長 大塚泰郎 副院長 木村信行	〒477-8522 愛知県東海市中之池三丁目一番地の一 公立西知多総合病院 副院長 吉原靖基 副院長 伊藤光弘 副院長 有牧野 副院長 植村真美
〒470-0396 愛知県厚生農業協同組合連合会 豊田厚生病院 院長 川口鎮	〒489-8642 公立陶生病院 副院長 川岡正純 副院長 近藤義久 副院長 浅野康博	〒448-8505 刈谷医療法人 豊田会 刈谷豊田総合病院 副院長 田中守嗣 副院長 田島英司 副院長 吉原憲司 副院長 小松建司 副院長 林祐二	〒498-8502 愛知県厚生農業協同組合連合会 海城南病院 病院長 奥村明彦	〒444-8553 愛知県岡崎市高隆寺町五所合三番地の一 岡崎市民病院 院長 早川文雄

院 長 神谷 里明	津 島 市 民 病 院 〒496-8537 愛知県津島市橋町三丁目七番三番地	副院長兼看護局長 間瀬 有奈 副院長 成平 賢 副院長 小瀬 洋 副院長 山井 久 副院長 雄山 泰 副院長 浦山野 文 院長 河崎 博	豊 橋 市 民 病 院 〒441-8570 愛知県豊橋市青竹町字八間西五〇番地	副院長 坂田 豊博 副院長 須田 孝光 副院長 久納 孝夫 院長 加藤 健司 病院事業管理者兼院長 病院長 藤司	稲 沢 市 民 病 院 〒492-8510 愛知県稲沢市長束町沼一〇〇番地	統括顧問 渡邊 有三 副院長 祖父江 聡 副院長 山口 竜三 副院長 佐々木 光 院長 成瀬 友彦 院長 成瀬 友彦	春 日 井 市 民 病 院 〒486-8510 愛知県春日井市鷹来町一丁目一番地一	病 院 長 長谷 智	愛 知 県 厚 生 農 業 協 同 組 合 連 合 会 渥 美 病 院 〒441-3415 愛知県田原市神戸町赤石一番地一
院 長 松浦 昭雄	一 宮 市 立 市 民 病 院 〒491-8558 愛知県一宮市文京二丁目三番三二号	副院長 杉野 安輝 副院長 石木 良治 副院長 小口 秀紀 病院長 岩瀬 三紀 名誉院長 稲垣 春夫	トヨタ記念病院 〒471-8513 愛知県豊田市市平和町一丁目一番地	最高経営責任者 最高執行責任者 院長 中村 誠 最高執行責任者 河辺 義和 最高執行責任者 城 卓志	浦 郡 市 民 病 院 〒443-8501 愛知県蒲郡市市平田町向田一番地一	副院長 竹之内 靖 副院長 野崎 裕広 院長職務代理 中川 隆	常 滑 市 民 病 院 〒479-8510 愛知県常滑市飛香台三丁目三番地の三	院 理 事 長 小林 一郎 長 弥政 晋輔	社 会 医 療 法 人 財 団 新 和 会 八 千 代 病 院 〒446-8510 愛知県安城市住吉町二丁目二番七号
病 院 長 河野 彰夫	愛 知 県 厚 生 農 業 協 同 組 合 連 合 会 江 南 厚 生 病 院 〒483-8704 愛知県江南市高屋町大松原一三七番地	理事長・学長 祖父江 元	愛 知 医 科 大 学 〒480-1195 愛知県長久手市岩作雁又一番地一	病院事業管理者 院長 谷口 健次 病院事業管理者 末永 裕之	小 牧 市 民 病 院 〒485-8520 愛知県小牧市常普請一丁目二〇番地	医学部長 岩田 仲生 学部長 湯澤 紀夫 学部長 小野雄一郎	学 校 法 人 藤 田 医 科 大 学 園 藤 田 医 科 大 学 園 〒470-1192 愛知県豊明市杓掛町田楽ヶ窪一番地九八	副院長 金澤 英俊 副院長 杉浦 厚司 副院長 杉浦 誠治 病院長 亀岡 伸樹	碧 南 市 民 病 院 〒447-8502 愛知県碧南市平和町三丁目六番地
副 院 長 和 田 応 樹 副 院 長 田 中 俊 郎 副 院 長 齋 藤 晴 彦 院 長 梶 宜 政 隆	西 尾 市 民 病 院 〒445-8510 愛知県西尾市熊味町上泡原六番地	院 長 度 会 正 人	愛 知 県 厚 生 農 業 協 同 組 合 連 合 会 安 城 更 生 病 院 〒446-8602 愛知県安城市安城町東広畔二八番地	副院長 渡井 至彦 副院長 山室 幸彦 副院長 吉田 行彦 副院長 関 公治 院長 佐藤 雄	日 本 赤 十 字 社 愛 知 医 療 セ ン タ ー 名 古 屋 第 二 病 院 〒466-8650 名古屋市中昭和区妙見町二番地の九	院長 奥田 聡	独 立 行 政 法 人 国 立 病 院 機 構 東 名 古 屋 病 院 〒465-8620 名古屋市中東区梅森坂五丁目一〇一番地	副 院 長 今 田 広 子 副 院 長 藤 田 芳 郎 副 院 長 丸 井 伸 行 院 長 佐 藤 啓 二	独 立 行 政 法 人 勞 働 者 健 康 安 全 機 構 中 部 勞 災 病 院 〒455-8530 名古屋市中港区港明一丁目一〇番六号

〒461-0001 名古屋市中区泉三丁目二番五号 医療法人社団 葵会 A O I 名古屋病院 院長 三島 信彦	〒464-8512 名古屋市中区千代田橋一丁目一番二号 国家公務員共済組合連合会 東海病院 名誉院長 早川 直和 院長 山本 英夫 副院長 丸田 真也 診療部長 牧野 仁美	〒460-0001 名古屋市中区三の丸一丁目三番二号 国家公務員共済組合連合会 名城病院 院長 後藤 秀実	〒460-0001 名古屋市中区三の丸四丁目一番一号 独立行政法人国立病院機構 名古屋医療センター 院長 長谷川 好規 副院長 竹田 伸 副院長 富田 保志	〒460-0002 名古屋市中区丸の内三丁目二番三号 中日病院 病院長 横井 香平
〒457-8511 名古屋市中区白木町九番地 社会医療法人 宏潤会 大同病院 理事長 宇野 雄祐 理事 長 野々垣 浩二	〒451-0052 名古屋市中区栄生一丁目一番一八号 社会福祉法人 愛知県済生会リハビリテーションセンター 愛知済生会リハビリテーションセンター 名誉院長 長嶋 正實 顧問 院長 補佐 長 田内 宣生 副院長 岩田 徹也 副院長 奥村 直哉	〒453-0801 名古屋市中村区太閤三丁目七番七号 名古屋セントラル病院 副院長 中尾 昭公 副院長 川島 靖浩 副院長 大島 健司 副院長 曾村 富士	〒451-8511 名古屋市中村区栄生三丁目二番一、二番二、三番一、二番二、三番一、二番二 名鉄病院 病院長 細井 延行	〒453-8511 名古屋市中村区道下町三丁目三五番地 日本赤十字社愛知医療センター 名古屋第一病院 副院長 錦見 尚道 副院長 水野 純一 副院長 花野 公純 副院長 山口 丈夫 副院長 山本 芳洋
〒457-8510 名古屋市中区三条一丁目一番一〇号 独立行政法人地域医療機能推進機構 中京病院 副院長 後藤 百万 副院長 加田 賢治 副院長 林 英司 副院長 大野 稔人	〒454-8502 名古屋市中区中川松年町四丁目六六番地 公益社団法人日本海員救済会 名古屋救済会病院 名誉院長 馬淵 千之 院長 河野 弘	〒459-8540 名古屋市中区緑区南大高二丁目二〇四番地 総合病院 南生協病院 副院長 長江 浩幸 副院長 山田 裕典 副院長 水野 義典 副院長 長谷川 誠 副院長 長田 芳幸	〒466-8633 名古屋市中区昭和区川名山町五六番地 社会福祉法人 聖霊会 聖霊病院 院長 春原 晶代	〒456-8611 名古屋市中区熱田区五番町四一三三 みなと医療生活協同組合 協立総合病院 院長 堀井 清一
〒468-0031 名古屋市中区天白区高宮町一三〇二番地 社会医療法人 名古屋記念財団 新生会 第一病院 院長 伊奈 研次	〒462-0802 名古屋市中区北区上飯田北町二一七〇 医療法人 愛生会 総合上飯田第一病院 理事長 片岡 祐司 理事 山口 洋介	〒468-8520 名古屋市中区天白区平針四丁目三〇五番地 社会医療法人 名古屋記念財団 名古屋記念病院 副院長 長谷川 真司 副院長 佐川 博元 副院長 吉本 久哲 副院長 福岡 純平 副院長 伴樹	〒453-8566 名古屋市中村区竹橋町三五番二八号 医療法人 衆病会 増子記念病院 理事長 兼 院長 両角 國男 副院長 山崎 親雄 副院長 小山 寛一	学友会 時報部 一同

人生
山あり谷あり

第 64 回「妻の付き添い」

名古屋大学名誉教授 いぐち あきひさ
愛知淑徳大学教授 井口 昭久

外来へ通院中の男性患者に妻がついてくることがある。
 その場合には 3 つの型がある。
 1 つ目は妻が夫を犬のように連れてくるタイプである。
 妻は医者へ夫の至らなさを延々と述べる。そして医者から夫に注意をして欲しいという。
 「お酒を止めるように行ってくださいよ、先生！！私がいくら言っても駄目なんです」というようなケースである。
 妻にとって医者は自分の味方だと思っている。医者も妻の言いつ分を一方的に信じて疑わない。
 妻は善で夫は悪であると多くの医者はそう思いがちである。
 夫は何を言っても信じてもらえないと、諦めてずっと黙って聞いている。
 妻に悪意はないので診察室の空気はそれほど悪くはない。
 2 つ目は密告型といえるもので診察室が冷たい空気になる。
 妻は夫に従ってついてくるように見えるが、夫への深刻な不満を医者へ打ち明けようとして来院する。そして医者への不信も持っている。
 認知症の所見は全くない夫についてきた妻がいた。
 「夫は認知症ではない」と私が告げると妻は不満そうな表情になった。二人で外来を出た後で妻だけが引き返してきて「実は一」といって、「あの人は認知症です。私が一番分かっています。」と言って「先生は、何も分かっていない」と、口には出さないが、そう言いたそうな表情になった。
 夫の暴力の跡だと言ってスマホに写っている腕のアザの写真

を私に見せた妻もいた。
 3 つ目は仲のいい夫婦である。
 いたわるように寄り添ってきて、夫の病態が良好であると、言われると妻に満面の笑みが生まれる。
 医者も看護師も嬉しくなって診察室が幸福感に溢れる。
 イギリスの小説家フォスターは
 「仲の良い夫婦は社会にとって非常に重要なもので、これを生み出せない文明はすべて失敗である。人類の真の歴史は愛情の歴史なのだ。これに比べれば他の歴史等は総べて偽りである。」と述べている。



新春後記

新年明けましておめでとうございます。昨年はコロナの影響で授業や部活動など様々な活動が制限される中、時報部に入学させていただき、自分の世界が広がった一年になりました。時報部の活動をする中で普段の学生生活では知ることができないことに触れることができ、時報部の活動に携われることに喜びを感じております。

また秋からは医学部硬式テニス部の主将を務めさせていただいています。部を運営するということに加えて、感染対策にも十分留意しなければならぬため非常に責任を感じておりますが、その中で部員の意見を聞きながら今出来ることを模索していくことに大変やりがいを感じております。今年に残りの大学生活もあと半分に、夏には三年ぶりの開催が期待される西医体が、秋には CBT があります。昨年以上に忙しい一年となることが予想されますが、勉強も部活動も全力で取り組んでいきたいと思っています。今年もどうぞよろしくお願い致します。 下川 浩希

新年あけましておめでとうございます。皆様健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。昨年は時報部に入りコロナで新たな人間関係を作ることが難しい中、先生方や先輩方とお会いすることで改めて人の繋がりを感じることでできた一年となりました。

今年 1 月に所属する医学部混声合唱団での 100 周年の記念定期演奏会が行われます。加えて兼部している水泳部の方では西医体を主幹として迎え、それが終わると CBT が待ち構えているというイベントが盛りだくさんの 1 年となりそうです。オミクロン株が発見されるなどまだまだ見通しのたたない日々が続きますが、勉強も部活動も遊びも今やれることを精一杯やっていきたいと思っています。本年もどうぞよろしくお願い致します。 薫 瑞生

新年明けましておめでとうございます。昨年時報部に入学させていただき、多くの先生や先輩に大変お世話になりました。所属するラグビー部では最高幹部の学年となり、様々な面で後輩の手本となれるような姿を見せていかねばならないと痛感しておりますが良いチームを作ることができるよう日々励みたいと思います。また兼部先の硬式野球部では主将を務めさせていただいており、こちらでは自由な雰囲気といった良さを残しつつ短い時間の中でよりスキルを向上できるように工夫したいと思います。今年こそ西医体が開催されれば良い報告をしたいです。

また現在は基礎医学セミナーで木村先生のウイルス学に配属され様々な経験をさせていただいています。今年 CBT があるなど勉強面でもより一層精進していきたいと考えております。本年度もよろしくお願い致します。 成田 尚生

本時報に対するご意見、ご感想、情報等は jiho@hotmail.co.jp までお寄せ下さい。

部長	梶山 広明	6 年	高見 音宇	石田 萌	東島 弘樹	山邊 晃
委員	芳川 修久	5 年	石丸 怜奈	加藤康太郎	チーフ 関沢紀彦	中野 阿美
	玉内 学志	4 年	北原康太郎	瀬瀬 萌衣	増田 涼花	渡邊 洋
学友会事務局	中島 千夏	3 年	薫 瑞生	穴戸 聖征	下川 浩希	成田 尚生

発行所 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町 65
 名大医学部学友会
 編集発行人 学友会内 梶山 広明
 印刷所 名古屋市千種区不老町 1
 名古屋大学消費生活協同組合印刷部

購読料 (年 7,000 円 会費に含む) 毎月 22 日発行
 学友会 振替口座 (00880 - 7 - 3838)
 電話 (052) 744 - 2512 (直通)
 FAX (052) 741 - 7676